

# 秋期の耕起によるヒメトビウンカ越冬世代虫の防除効果

○吉田和弘・三浦宏晴・柳澤由加里・富原工弥・田中雅也・八瀬順也  
兵庫県立農林水産技術総合センター

ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を媒介する稲の重要害虫であり、国内では水稻収穫後の圃場内や畦畔において幼虫で越冬する。越冬世代虫の防除には耕起が有効であり、厳冬期の1月や2月に耕起を実施した場合、越冬世代虫の密度低減に高い効果が期待できる。しかし、イネ縞葉枯病が問題となっている地域では、収穫後速やかに耕起し、縞葉枯病の感染源となる再生稲（ひこばえ）の除去を行うため、厳冬期の耕起は実施していない。これまでのところ、収穫後速やかに耕起した場合の密度低減効果について明らかになっていないため、本研究では収穫後の早い時期に耕起した場合の効果について検討した。

当センター内の圃場（10×50m）を6区画に分けて、11月耕起区と1月耕起区、不耕起区をそれぞれ2反復設定した。密度調査は各処理区において、調査毎に任意の3か所を選び、0.5×0.5mの枠内を吸引採集機で採集した。採集は11月から3月までの期間、月1回の頻度で実施した。

耕起を実施した区では、耕起時期に関わらず、耕起後の調査時から著しく密度が低下し、その後も低密度で推移した（図）。一方、不耕起区では、11月から3月まで大きな密度変化はなかった。また、3月における各処理区と不耕起区の密度比は、11月耕起区14%、1月耕起区19%で、11月耕起区は1月耕起区と同等の密度低減効果が認められた（表）。

以上のことから、収穫後の早い時期に耕起を実施した場合も厳冬期と同様に、越冬世代虫に対する防除効果が期待でき、感染源除去の観点からも秋期の耕起は耕種的防除法として有効だと考えられる。

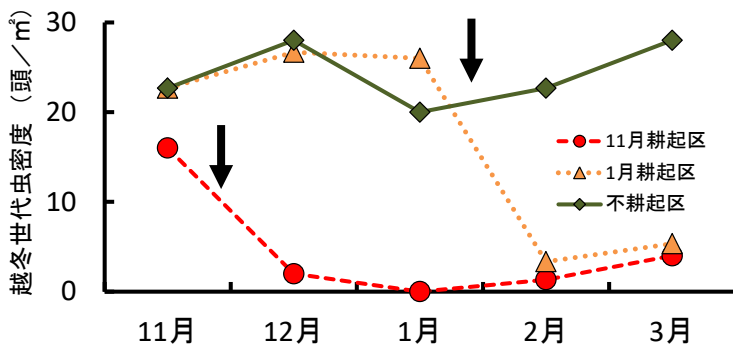


表 耕起時期別のヒメトビウンカ越冬世代虫の密度低減効果

対不耕起区比 (%)	2月	3月
11月耕起区	5.9	14.3
1月耕起区	14.7	19.0

※対不耕起区比= 各月各処理区密度/各月不耕起区密度×100

図 耕起時期別のヒメトビウンカ越冬世代虫の密度推移  
矢印は各処理区での耕起時期を示す。

Control of overwintering generation nymph of *Laodelphax striatellus* (Fallén) by ploughing at Autumn.

Kazuhiro Yoshida, Hiroharu Miura, Yukari Yanagisawa, Takuya Tomihara, Masaya Tanaka, Junya Yase

Hyogo Prefectural Technology Center for Agriculture, Forestry and Fisheries.